

ディルク・ファン・バビューレン作《キリストの埋葬》の図像源泉と注文主

深谷 訓子 (尾道大学)

ローマ、サン・ピエトロ・イン・モンテ・リオ教会ピエタ礼拝堂には、17世紀初頭にユトレヒト出身の画家ディルク・ファン・バビューレンが制作した祭壇画《キリストの埋葬》が今も設置されている。本祭壇画はこの画家の代表作として、また、北方出身の画家がローマで獲得した重要な注文の例として注目されてきた。マンチーニによれば当時弱冠 22、3 歳だったというファン・バビューレンは、この機会を十分に活かし、キリストの足先が画面外に突出してくるかのような、迫りに満ちた画面を作り上げている。カラヴァッジョの《キリストの埋葬》(ヴァチカン絵画館)を参照していることは明らかで、暗い背景から人物たちを浮かび上がらせる明暗法や嘆き悲しむ人々の身振りにその痕跡がみとめられる。

本発表で論じるのは、ファン・バビューレンがカラヴァッジョ作品に加え、ティツィアーノの《キリストの埋葬》を図像源泉としていた可能性についてである。ファン・バビューレンのキリストの姿勢がカラヴァッジョ作品のものとは異なる系譜に連なるということは、これまでも指摘されてきた。上体を起こした座位を基本形として展開する姿勢は、むしろルーベンスやディルク・バーレンスゾーンらも選択している北方的な類型だというのである。確かにキリストの基本姿勢に関しては、これらの画家たちの作例との類似点もある。しかしこの祭壇画で特に印象的な、キリストの上半身が画面手前に向かって傾いているという珍しい表現は、これらの作例にはみられないのである。本発表では、キリストの姿勢という点でファン・バビューレンの作品にかなり近い先例として、ティツィアーノがスペイン王フェリペ2世のために制作した《キリストの埋葬》(プラド美術館)の描写を指摘したい。ファン・バビューレン作品との共通点は、キリストの体重を一部石棺に預けるかたちでの重心移動の表現などにも認められる。もちろんここでは文字通りの借用がなされているわけではない。従って、こうした形態の類似について、また 1559 年以来スペインに所蔵される作品の知識を得た機会等については慎重に検討する必要がある。

また参照の背景として注目したいのが、祭壇画の注文主クシーデ(クシーダ)との関係である。サン・ピエトロ・イン・モンテ・リオはスペインと縁が深く、クシーデはローマにおけるスペイン王の代理人を務めた人物であった。ファン・バビューレンはそうした注文主の地位も考慮に入れ、《キリストの埋葬》に、君主所有のティツィアーノ作品への言及を含めるという工夫を施したのではないだろうか。発表ではさらに具体的な傍証を挙げつつ、これまで指摘されてこなかったファン・バビューレンのティツィアーノ作品参照の可能性について、注文主との関連、およびファン・バビューレンの芸術的関心の範囲の両面から検討を加える。